

氏 名 条 汐里

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1862 号

学位授与の日付 平成28年9月28日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本文学研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 中・近世語り物の形成と享受に関する研究

論文審査委員 主 査 教授 山下 則子
教授 小林 健二
准教授 太田 尚宏
名誉教授 小峯 和明 立教大学
名誉教授 阪口 弘之 大阪市立大学、
神戸女子大学

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本博士論文は、中世末期から近世初期にかけて流行した語り物芸能、説経・古浄瑠璃の通史の変遷を、他の文学ジャンルおよび社会現象との関わりの中で捉えようと試みたものである。第一部では近世初頭に演目が「生成」され、流行の芸能として「展開」してゆく過程について、第二部では語り物が地域社会に「受容」され、地域の文芸として「再創造」されてゆく経過について明らかにしている。

〈第一部〉

「奈良絵本」と称される極彩色の絵巻・絵入り写本の多くは、近世の寛文・延宝期に最も多く制作されたことが明らかになっている。しかし、絵巻や絵入り写本は、中世以前の研究ジャンルであるお伽草子として作られたと認識されており、中には説経・古浄瑠璃の詞章をもちながら、現在もお伽草子と混同される例が確認できる。

これをうけて第一章では、『説経正本集』『古浄瑠璃正本集』の解題と『お伽草子事典』をもとに絵巻・絵入り写本となった説経・古浄瑠璃作品をリスト化し、各作品を正本（版本）と写本に分けた。次に、写本の挿絵と正本（版本）の挿絵とを比較し、説経・古浄瑠璃の絵巻・絵入り写本には、正本（版本）を元にした作例がないことを明らかにした。また本文の古態性や挿絵の独自性から、説経・古浄瑠璃の絵巻・絵入り写本は、版本を元に大量生産された舞曲と違い、豪華で大部な一点ものの作例が主であると述べた。

第二章では、絵巻・絵入り写本化された説経・古浄瑠璃の重要性を示す一例として、個人蔵の『しゅつせ物語』三冊を紹介した。この本は『さんせう太夫』を絵入り写本化したものであり、形態の特性から極初期の説経テキストと判断できるが、中・下巻の一部に他の正本と異なる本文を有している。その中の天王寺に代わって北野天満宮を舞台とする箇所を焦点をあてて、この絵入り写本の制作に近世初期の芸能興行の場が関係することを指摘した。

第三章、第四章では、説経・古浄瑠璃作品の素材について検討した。近世以降、説経や古浄瑠璃が芸能として台頭する中で多くのレパトリーが誕生し、題材は中世以前の様々な文芸から摂取されていった。その実態は軍記、お伽草子、幸若舞曲を題材とした作品の詞章を通じて明らかにされているが、草創期の浄瑠璃を集めた『古浄瑠璃正本集』一・二の中には未だ典拠不明とされる作品もあり、その解明を具体的に試みた。

まず第三章では、説経・古浄瑠璃の初期の演目である『阿弥陀胸割』をとりあげ、寺院唱導の場で成立した説教台本・経典注釈書・寺院唱導書との関係を精査した。結果、物語の眼目である少女の身代わりというモチーフが、『説経才学抄』『見聞隨身鈔』『往因類聚抄』などの、中世の説草集や天台宗の法華経注釈書に見いだせることを指摘した。さらに上演が集中する慶長19年という時間に着目し、観世流謡本表紙裏張りに用いられた反古紙書き付けの目録（慶長19年頃の墨書）に『阿弥陀胸割』の書名が三箇所も確認できることから、慶長19年の演劇界と出版業界双方で『阿弥陀胸割』が流行していたことを述べた。

第四章では、古浄瑠璃の大半を占める武家物の成立の一端について検討した。地方武士の内紛をテーマとする武家物は、地方で書き連ねられてきた武家家伝や系図を素材に、語り物化された作品と目される。一例として栃木県内に流布している異本系『堀江物語』を取り上げ、諸本の比較によって異本系統が矢板市の在地領主・堀江（塩谷）三郎頼純の伝説を元にした、在地系の伝本であることを明らかにした。次に塩谷氏の祈願所であった『寺

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

山観音寺縁起』や塩谷氏旧臣の家記との共通点を指摘し、制作の背景に塩谷氏末裔の由緒の編纂活動があったことを述べた。

〈第二部〉

第二部では、説経『小栗判官』にまつわる神奈川県下の三つの地—横浜市金沢区六浦・藤沢市遊行寺小栗堂・同市西俣野—をとりあげ、物語が地方特有の文芸として定着してゆく過程を解明した。また、それに関連させて、幕末から明治にかけて親しまれた藤沢市辻堂の和讃資料群の全体像と『小栗判官』の和讃の成立過程を明らかにした。

第一章では、横浜市金沢区六浦に伝わる照手姫伝承の展開について述べた。六浦には照手姫受難伝承の一つとして照手姫の燻し松があり、宿場や街道の伝承として万治2年以前から親しまれていたが、本章では、貞享2年に水戸光圀と彰考館員らによって上梓された『新編鎌倉誌』の権威性と、金沢を含む「三所巡り」という人々の参詣行動によって、六浦を起点とした伝承の創造、増補、流布があったことを述べた。

第二章では、『小栗判官』伝承の中心的存在である神奈川県藤沢市の時宗総本山清浄光寺（遊行寺）長生院小栗堂と、時宗の勧進活動との関わりについて論じた。まず小栗堂の縁起の成立について、後期軍記である『鎌倉大草紙』が縁起本文に摂取されていることを確認した。次に縁起のみに確認できる遊行十四代・太空上人という僧が、時宗の唱導にしばしば登場する人物であることを説き、また、日鑑にみえる長生院の勧進活動に関する記事をあげ、時宗が藤沢における『小栗判官』の伝播に深く関与していたことを明らかにした。

第三章では、長生院小栗堂の閻魔信仰が派生した例として、藤沢市西俣野花應院で行われる絵解き行事について報告した。同院には『小栗判官』の縁起絵と十王図が所蔵されており、それらを用いて小栗判官の一代記と、地獄の場面が絵解きされている。はじめに絵解き行事の概要を紹介したのち縁起絵の書誌について述べ、縁起絵が説経正本の挿絵の影響を受けていることを指摘し、次に絵解き台本が俣野周辺の景観描写や、土地特有の小栗蘇生伝承を増補していることを確認した。

第四章では、幕末から明治にかけて収集された55冊の和讃帳を紹介し、語り物資料としての和讃の意義について報告した。和讃帳は、藤沢市辻堂茂兵衛資料館館長の親族の所持品であった。まず和讃帳を5分類した目録を作成し、全本文を翻刻した。そのうち藤沢に縁の深い『小栗判官照天姫和讃』を取り上げ、和讃の題材となる場面の特性、女房詞を由来とした七色の意味、天王寺庚申堂の供物を売る「七色売」について指摘し、説経の一場面が和讃として再創造されてゆく過程について論じた。

以上、中世から近世にかけての語り物芸能である説経・古浄瑠璃を、演目の「生成」、流行芸能としての「展開」、地域社会における「受容」、地域文芸としての「再創造」という四つの段階から追究した。従来は、語り物の成立初期に関する研究が集中していたが、本論では衰退以後に生じた地方資料の意義について第一部第四章や、第二部で取り上げ、「形成」のみならず、地域における「享受」という側面からも語り物の本質があると説いた。今後は中央における出版・上演文化だけでなく、地方資料も考察対象とすることで、中央と地方の双方から語り物通史を完成させる必要があると考えている。

博士論文の審査結果の要旨
Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、説経・古浄瑠璃という語り物文芸を題材に、その成立と展開としての受容や再創造の様相を、中世末から近代までを視野に入れて、総合的に位置づけようとする意欲的な構想から成る。成立論においては、正本（版本）と絵巻・絵入り写本との関係や法会唱導からの影響、展開論においては、説経・古浄瑠璃の地域伝承としての再生、他ジャンルへの拡がりに注目している。説経・古浄瑠璃は、中世末から近世初期までの時代芸能であり、その流れは浄瑠璃・歌舞伎へと継承されるのであるが、本論文は敢えてそれらとの関係には触れず、説経・古浄瑠璃そのものとの直接的な位置関係、影響関係に焦点を当てる。本論文は、序論および第1部「語り物の生成と展開」（全4章）、第2部「語り物の受容と再創造」（全4章）、結論という構成になっており、資料編として出願者自身が発見した資料3件の翻刻を付す。

第1部では、あまり取り上げられてこなかった絵画化（絵巻・絵入り写本）による享受と、法会唱導の場による物語の形成に注目した。第1章は、説経・古浄瑠璃題材の絵巻・絵入り写本を一覧化し、研究資料としての活用の可能性を検証した。幸若舞曲題材の絵巻・絵入り写本が正本挿絵に依拠して制作されるのに対して、説経・古浄瑠璃題材の絵巻・絵入り写本が、正本挿絵の影響を受けずに豪華な一点物として注文制作されたことを指摘した。第2章は、説経『さんせう大夫』を題材とした個人蔵の奈良絵本『しゅつせ物語』を紹介した。貴重な資料である『しゅつせ物語』は豪華本で、原話の残虐な部分が薄められ祝言性を重んじた物語として再生されている。出願者は物語の伝播や形成の場として北野天満宮との関係を指摘し、新たな問題提起を行った。その一方で、『しゅつせ物語』は物語成立の一つの基盤ともいべき天王寺に関わる描写を削除しているのであり、天王寺という「物語生成の場」と北野という「語りの場」がどのように作品内容に絡みあっているのか、重要な問いかけを孕んでいるとも思われる。第3章は、古浄瑠璃『阿弥陀胸割』が形成される土壌についての考察で、類似する番外謡曲「厚婦」を介して法華経注釈書・説話集所載の類話からの影響を指摘し、阿弥陀が身代わりになる流血の部分に、上演が集中する慶長19年の前年に出された禁教令との接点を見いだす。古浄瑠璃の素材に法会唱導の影響を見だし、歴史的背景を考察した点が高く評価される。第4章は、下野国塩谷（しおのや）郡における武家の内部抗争・復讐を描いた『堀江物語』の異本系統を掘り起こし、その成立過程を分析した大きな成果である。地元の村方文書群の中にあつた異本系統は、在地色が強い内容となっており、八幡太郎義家とのつながりや後日の出世譚などを加えたものがある。出願者は日本近世史研究の由緒論などの成果もふまえて、『堀江物語』をある時期に集中して書写した背景として、地域の歴史や由緒に対する塩谷氏旧臣の意識の高まりを指摘した。この時期には経済格差が発生して地域秩序が乱れ、旧来の家や地域の歴史を見直す動きが強まり、多数の「由緒書」や「村方旧記」が作成されている。異本再創造の起点となる時期の、社会や地域の動向について、更に深化させた検討・言及が望まれる。

第2部では、相模国の六浦（むつら）・藤沢・辻堂をフィールドとして、説経『小栗判官』の受容と再創造のあり方を、照手姫伝承古跡と名所化（第1章）、寺院縁起の形成と活用（第2章）、絵解きと台本（第3章）、念仏和讃と女性（第4章）といった観点から分析する。

(別紙様式 3)
(Separate Form 3)

第 1 章では、『新編鎌倉志』の編纂と『鎌倉大草紙』の地域波及の問題を前面に押し出して、伝承として残っていた語り物の痕跡が地誌編纂段階での「考証」を媒介にして地元で普及し、江戸時代の都市民達の観光名所として再創造された様相も述べ、評価される。第 2 章は、藤沢遊行寺の長生院小栗堂の縁起のうち重要な 4 点（文化年間写）についての考察を、『鎌倉大草紙』との関わりを中心に論じる。第 3 章では、藤沢市俣野地域の、説経『小栗判官』の絵解きに関する在地調査で発見した、絵解き台本『実説小栗判官一代記』を分析する。第 4 章は辻堂茂兵衛資料館に所蔵されてきた 55 冊の和讃帳を目録化し、特に『小栗判官照天姫和讃』を取り上げて、謎解き要素の強い「七色買物」の内容を考察する。即ち第 2 部は、第 1 章・第 2 章が近世中後期の当該地域における説経『小栗判官』の「受容」と「再創造」、第 3 章・第 4 章が近世中後期に形成された『小栗判官』像を基盤にした近代以降における更なる「受容」と「再創造」という構成となっている。

本論文は、語り物の変遷を「生成」「展開」「受容」「再創造」という 4 つの流れからとらえ、文学・芸能の分野のみならず、民俗学や歴史学の研究成果を取り入れつつ、丹念なフィールド調査と資料の博搜及び先行研究の活用によって、従来の説経・古浄瑠璃研究にはなかった“享受”という側面を浮かび上がらせた研究で、その意欲的な研究姿勢と視点・方法は大いに評価できる。

その一方で本論文では、各作品の生成や受容を論じるに際し、時代的・社会的な背景に言及する場面で、その理解がやや平板な印象を受ける。特に 18 世紀中葉から後半にかけての社会変容については、第 1 部第 4 章および第 2 部第 1 章・第 2 章の論点に直接関わるものであるだけに、もう一步踏み込んだ考察が求められよう。しかしながら本論文は、在地資料調査をも含む膨大な資料調査や先行研究の博搜によって成されており、特に第 1 部第 2 章～第 4 章の高い完成度と独自性は、その欠点を補って余りあるものがある。故に本論文を課程博士の学位授与審査に合格と判断する。

なお、出願者の活字化された論文数は 14 本（掲載予定 1 本）、国際学会をも含む学会等での口頭発表は 8 回で、学位授与に相当する水準を十分に満たしており、在籍状況、履修状況、研究指導状況について確認したことを付記する。